

# 中国における考古地理学の展開

王 妙発

## 一、学科理論の導入

「考古地理学」という学科名は日本で生まれたもので、1990年代に中国に導入され、次第に確立されてきた<sup>1)</sup>。この学科を簡潔に定義すれば、「考古学資料（遺跡・遺物等実物的資料）を用いて、人類の歴史上（先史時代並びに有史時代）における地理的現象を研究する学問」となる。考古地理学は、考古学のデータ、考古学的研究方法、研究成果を多用するが、地理的性質の問題を探求（解決）することに焦点を当てるため、学問の属性上、考古学に属せず、地理学、特に歴史地理学に属し、歴史地理学の下位分野であると認識されている。

考古地理学は、歴史地理学と同じ研究対象に焦点を当てているが、大きく二つの相違点がある。一つは、考古地理学は研究資料及び研究方法においては主に実物資料（考古学のデータ）を使用すること、もう一つは、取り扱う年代の幅が広く、特に文献資料のない「先史時代」にも焦点を当てることである。

また、考古地理学と考古学との間にも類似点と相違点がある。類似点として、どちらも考古学的調査または発掘から得られた実物資料を研究対象とするが、考古地理学は実物資料の背景となる「地理的要素」、つまり空間的および環境的要素により多くの注意を払う。もちろん、考古学も地理的空間を非常に重要視する学問である。例えば、遺跡間関係の研究では、地理的空間の検討が行われ、「考古学文化の分布範囲」とは実は文化地理学的な表現でもある。考古学は遺跡や遺物を「歴史的事実の担い手」として扱い、遺跡や遺物を通じて「歴史的」真実を得ることを目的としている。一方の考古地理学は、人類の歴史における「地理的・環境的」真実を得るために、遺跡や遺物を空間や環境に関連する「地理的証拠」として扱い、遺跡や遺物を通じて「地理的」真実を得ることを目的としている。なお、考古地理学は考古学と同じく、研究の結論はしばしば一定の「不確実性」を持っている。すなわち、各段階の研究結果は「一時的」であり、往々にして新しい考古発見によって修正される可能性があるということを、ここで指摘しておきたい。

さて、中国の考古地理学という学科は日本より導入されてきた。まず、学科の生まれた背景を紹介することにしよう。

考古地理学は、1941年、歴史地理学者の藤岡謙二郎氏によって「考古地理誌」という概念が

1) 小野忠熙（王妙発訳）「考古地理学之意義」、『歴史地理』第13輯、上海人民出版社1996年

最初に提唱された<sup>2)</sup>ところに起源を持つ。ここでいう「誌」とは「文献地誌」と違い、考古学的データに具現化された「遺跡地誌」の意味を持つ。

1953年、藤岡謙二郎氏は歴史地理学を広義的と狭義的との二種類に分け、更に、広義的歴史地理学をデータ利用の観点から再分類し、実物資料（考古学データ）を用いて地理学課題を研究する方法を初めて「考古地理学（Archaeological geography）」と命名し、この学問の概念を定めた<sup>3)</sup>。

その後の1962年、日本歴史地理学会は、実物研究史料を検討するシンポジウムを開き、会議後に出版された論文集には『考古地理学—日本歴史地理学会紀要5』と題が付けられた。これで「考古地理学」は学科として正式に日本歴史地理学界に受け入れられ、また世界で初めて専門の学術機構から「考古地理学（Archaeological geography）」を新しい学科として正式に受け入れられたのである。

これを出発点として、考古地理学は日本で大きく発展を遂げてきた。その代表的な研究者は日本歴史地理学界の第一人者と言われる藤岡謙二郎氏である。彼の研究成果は、1982年から1989年にかけて刊行された、自ら主編を務めた『講座考古地理学』（全5巻、1982年～1989年出版、学生社）に代表される。『講座考古地理学』の執筆者は日本歴史地理学界及び考古学界の研究者数十名にのぼり、その出版は日本考古地理学研究成果の集大成と言えよう。

藤岡氏他に、この分野の発展に重要な役割を果たしたもう一人の学者は、考古地理学の創始者の一人でもある小野忠熙氏である。小野氏はとりわけ考古地理学の理論構築に尽力し、「考古地理学」を理論的に論じた論文「考古地理学の意義」を発表している<sup>4)</sup>。筆者は、小野論文が考古地理学の学問分野の構築において特別に重要だと見て、それを翻訳し中国の歴史地理学界に紹介した<sup>5)</sup>。

小野忠熙氏は考古地理学に関する著作を多く発表しており、『日本考古地理学』（ニュー・サイエンス社、1980年）と『日本考古地理学研究』（大明堂、1986年）は、日本考古地理学の代表著作といえる。小野氏の最も優れた研究は高地性集落（弥生時代）についてであり、代表作に『高地性集落論』（学生会、1984年）がある。この課題についてのその後の研究は今なお小野氏が達した水準を超えておらず、彼の著作はもはや「古典的」ともいえよう。

---

2) 藤岡謙二郎「河内平野と大和盆地、その考古地誌への一叙述」、『立命館大学論叢第二輯歴史地理篇』第1号、1941年

3) 藤岡謙二郎「先史地理学」、『新地理学講座』第7巻、朝倉書店1953年

4) 小野忠熙「考古地理学の意義」、『月刊考古学ジャーナル』(3)、1966年12月

5) 同注1

## 二、既存の考古地理学的研究

考古地理学は「人類の歴史における地理的現象を考古学データを利用して研究する学問」である。考古地理学的な研究は、その概念が中国に導入される前に、既に中国でも行われていたが、「学科」としての意識はまだ存在していなかった。

そもそも、現代考古学が中国に輸入されるとすぐに、考古学者たちは、早速考古学データを利用して地理的問題を解明する研究を始めていた。発掘調査で得た考古学資料を利用して考古地理学的な研究を行った王国維氏の「三代地理小記（夏－商－周三代の地理観察）」（『雪堂叢刻』1915年）及び王国維、羅振玉両氏の『流沙墜簡（砂漠で発見された木簡）』（中華書局、1993年）がその好例である。また、1950年代と1960年代に、李學勤氏が考古学データに基づいて殷王朝の地理を研究したこと<sup>6)</sup>、侯仁之と俞偉超両氏が協力してウランブホ砂漠を調査し、古代から現代にかけての変化を検討したこと<sup>7)</sup>、史念海氏の石器時代全体の定住現象に関する巨視的研究<sup>8)</sup>なども、考古地理学の研究として数えられる。以後、譚其驥氏と張修桂氏らによる馬王堆などで発掘された漢代地図の精査<sup>9)</sup>や、張修桂氏、雍際春氏らによる天水放馬灘で発見された漢代地図に対する一連の研究<sup>10)</sup>なども、紛れもなく典型的な考古地理学研究であると考えられる。

『中国歴史地図集』の編集にも数多くの考古学データが使われており、第一集最初の数枚の地図は考古地理学の研究成果だと言える。また、1980年代以降の文化遺物国勢調査の結果に基づいて編集された『中国文物地図集』（省、直轄市、自治区ごとに分冊がある）も、考古地理学の成果である。

また、考古地理学理論が導入される前に中国で行われていたいくつかの関連研究も、考古地理学の研究として見ることができる。その研究内容は、概ね次のように要約される。

- (一) 考古学と地理学に関する理論的・方法論的検討、文明の起源における地理的要因の検討等

- 6) 李學勤『殷代地理簡論』、科學出版社1959年  
 7) 侯仁之・俞偉超「烏蘭布和沙漠の考古發現和地理環境的變遷」、『考古』1973年第2期  
 8) 史念海『河山集』、三聯書店1963年  
 9) 譚其驥「馬王堆漢墓出土地圖所說明的幾個歷史地理問題」、『文物』1975年第6期  
 張修桂「馬王堆漢墓出土地形圖拼接復原中的若干問題」、『自然科學史研究』1984年第3期  
 張修桂「西漢初期長沙國南界探討—馬王堆漢墓出土古地圖的論證」、『中國歷史地理論叢』1985年第2期  
 張修桂「馬王堆『駐軍圖』測繪精度及繪製特點研究」、『地理科學』1986年第4期  
 10) 張修桂「世界上最早的地圖：天水『放馬灘地圖』」、『科學』1991年第2期  
 張修桂「天水『放馬灘地圖』的繪製年代」、『復旦學報』1991年第1期  
 雍際春「天水放馬灘地圖註記及其內容初探」、『中國歷史地理論叢』1998年第1期  
 雍際春「天水放馬灘地圖木板地圖與繪製年代新考」、『陝西歷史博物館館刊』第9輯、2002年  
 雍際春『天水放馬灘地圖研究』、甘肅人民出版社2001年

- (二) 考古学的データを利用した特定時代における地理的問題の解明
- (三) 考古学的データに基づいた先史時代または歴史時代の地域経済に関する研究
- (四) 考古学的データに基づいた先史時代または歴史時代の輸送、水利、および軍事地理学に関する研究
- (五) 先史時代集落（遺跡）の地理学研究
- (六) 考古学における有名な「区域系統理論」（蘇秉琦氏に代表される）、及び各地域の考古地理学の研究
- (七) 考古学的データに基づいた人間と土地の関係、民族の分布、文化の影響と交流、適応と移住に関する研究
- (八) 考古学的データを利用した古代の地形、古代の環境および変化に関する研究
- (九) 考古学的データを利用した地図学についての研究

上記の分類と帰納は必ずしも的確ではないが、一応の目安となる。要するに、中国では、考古地理学的な研究は、考古地理学理論が導入される前から実質既に行われていたと考えられるということである。

### 三、受容－消化－進展

考古地理学理論が中国に導入され、漸進的に受容されるようになったその後の中国におけるこの分野の発展については、新しい研究成果と研究システムの変化という二つの側面から検討することができる。

#### (一) 新たな研究成果

より代表的で影響の大きい研究成果には、高蒙河氏の著書『長江下游考古地理』がある<sup>11)</sup>。本書は、氏が復旦大学歴史地理研究所に提出した博士論文「長江下游考古時代的環境研究－文明化進程中の生態系統和和人地關係」（葛劍雄教授指導、2005年に完成。その年の全国優秀博士論文に選ばれた）に基づいて完成されたものである。考古地理学理論に対する包括的な理解と習熟により、高氏はこの本において積極的に考古発掘・調査経験及び研究経験を生かし、長年集めてきた膨大な考古学データを活用した。本書は中国で初めて「考古地理学」という用語がつく本でもあり、出版後好評を博し、考古学界並びに歴史地理学界で広く注目を集めた<sup>12)</sup>。

高氏は意識的に中国考古地理学の発展を推進しようと、幅広い活躍ぶりを見せる。上記の著書に加え、彼はまた、「考古地理学」というストレートなタイトルを付けた一連の論文を執筆している<sup>13)</sup>。また、復旦大学文物博物館学部をプラットフォームとして、考古地理学専攻の修士

11) 高蒙河『長江下游考古地理』、復旦大学出版社2005年

12) 吳小平「走進考古地理學－讀『長江下游考古地理』」、『考古』2006年第7期

課程および博士課程の学生を指導し、学科人材の育成にも務めている。これらは、いずれも学科建設という明確な意識のもとで行った学術研究と推進行動であり、中国にてこの分野の研究発展を促進する上で非常に強力な役割を果たしていると考えられる。

さて、前述の高蒙河研究チームのように、明確な学科建設意識を持ったいわゆる「意識的」研究がある一方、「考古地理学の研究である」と意識はしていないが結果的に学科発展を促進している、いわゆる「客観的」研究も存在する。以下では、1996年に「考古地理学之意義」が発表されるのを機に、中国に考古地理学が導入された後の研究成果及び学科発展状況をまとめている。なお、言及する文献は全て、地理的要素に着目しそれについて議論し、尚且つ考古学データをも利用している考古地理学の定義に沿ったものである。

#### (1) 集落の考古地理学に関する研究

これは、特に要約し、強調する必要がある分野である。考古調査と発掘の最も一般的な対象はさまざまな集落（居住遺跡・城跡等）であるため、発掘調査資料に対する整理研究及び発掘調査報告に基づく個々の集落（遺跡）、或いは関連する集落（遺跡群）に関する研究は、これまで常に重視されて行われており、研究成果も多数蓄積されている。正確な統計ではないが、筆者の調べた範囲では、集落に関する考古地理学関連の研究は全体の約30%近くを占めている。

本分野における、考古地理学が導入される以前の比較的巨視的な調査と研究はまず、史念海氏による石器時代全体の集落定住現象に関する研究が挙げられ<sup>14)</sup>、加えて、王妙発の黄河流域の先史集落研究が挙げられるだろう<sup>15)</sup>。考古地理学学科が導入されてからは、共に意識的な考古地理学の調査と研究である、王妙発の『黄河流域聚落論稿』<sup>16)</sup>や、前述の高蒙河氏の『長江下游考古地理』などが挙げられ、集落理論に関するマクロ的な検討は、裴安平氏の先史集落形態研究に関する論文<sup>17)</sup>及び劉輝氏の先史集落と考古遺跡の研究<sup>18)</sup>などが挙げられる。また、「集落の面積及び等級に関して」<sup>19)</sup>の燕生東氏、「遺跡面積：考古データの遺憾」<sup>20)</sup>の高蒙河氏のように、集落（遺跡）の研究方法について非常に具体的かつ詳細な調査・検討を行う学者も増えている。集落特定の機能、特に防衛機能に関する研究は張志敏氏の「先史集落の二つの防衛工事：環濠と城壁」<sup>21)</sup>、そして、時代変化と集落形態変遷との関係を探る研究については、石永

- 
- 13) 高蒙河「考古地理学與三峡考古實踐」、『中原文物』2002年第6期  
高蒙河等「江南海岸線變遷の考古地理研究」、『東南文化』2006年第4期  
高蒙河等「寧紹地區早期遺址群の考古地理学分析」、『百越文化研究』、廈門大學出版社2005年
- 14) 史念海『河山集』、三聯書店1963年
- 15) 王妙発「黄河流域の史前聚落」、『歴史地理』第6輯、上海人民出版社1988年9月
- 16) 王妙発『黄河流域聚落論稿』、知識出版社1999年12月
- 17) 裴安平「關於史前聚落形態研究的幾個問題」、『中國文物報』2008年3月28日
- 18) 劉輝「史前聚落與考古遺址」、『東南文化』2000年第5期
- 19) 燕生東「關於判定聚落面積、等級問題的思考」、『中國文物報』2007年2月16日
- 20) 高蒙河「遺址面積：平面考古數據的遺憾」、『中國文物報』2004年4月2日
- 21) 張志敏「淺議史前聚落的兩大防禦工程—環濠與城牆」、『史前研究』、三秦出版社2000年

士氏の「集落・城壁・都—中国歴代都・宮殿建築史における夏商周三代の地位」<sup>22)</sup>が挙げられる。

1990年代以降より、集落地理学の中心地理論に関心が集まり、考古学者達はそれを具体的に研究に応用するようになった。山東半島の竜山文化城壁遺跡の発見によって、大型集落群、小型集落グループ、中央集落などの理論問題が注目され、一連の研究の発展が促進されたのがその典型的な例である。これは学際的な交流・相互浸透の結果であり、考古地理学の理論建設及び研究実践にとって非常に前向きな意味を持つ、考古学者が地理学理論を積極的に応用して実際の問題を探究解決した良い例である。なお、本研究に関しては数多く論文が存在する<sup>23)</sup>。

集落地理学において、都市地理学は不可欠な一分野である。本分野においては、外国の研究理論を中国の学界に紹介する論文や、先史時代から近代までの中国都市に焦点を当てて、考古学のデータを利用した様々な考察・検討を行う研究が多くあり、古代中国都市の方向性概念に関する研究や、夏-商-周の年代幅を特定する研究、都市内部構造の研究、都市移転に関する検討など、論題は多岐にわたる<sup>24)</sup>。

## (2) 研究・調査視点の多様化

考古学・歴史地理学における新しい理論の導入や実践的研究の発展の必要性により、考古地理学関連の研究は近年非常に盛んに行われており、研究・調査の視点もますます多様化している。

### a. 理論的思考と研究方法の探索

これについては、楊純淵氏「考古学と歴史地理学の関係」<sup>25)</sup>、王小盾・陶康華氏「中国先史文明研究における地理的方法」<sup>26)</sup>、王恩涌氏「文明起源の地理的分析」<sup>27)</sup>、宋豫秦氏「考古学と

22) 石永士「聚落・城・都城—試論夏商周三代在我國都城、宮殿建設發展中的地位」、『三代文明研究(一):1998年河北邢台中國商周文明國際學術研討會論文集』、科學出版社1999年

23) 山東省文物考古研究所、聊城地區文化局文物研究室「魯西發現二組八座龍山文化城址」、『中國文物報』1995年第4期

張學海「魯西兩組龍山文化城址的發現及對幾個古史問題的思考」、『華夏考古』1995年第4期

張學海「試論山東地區的龍山文化城」、『文物』1996年第12期

張學海「東土古國探索」、『華夏考古』1997年第1期

逢振鏞「山東龍山文化城址的發現及其歷史地位」、『山東社會科學』1995年第3期

樂豐實『海岱地區考古研究』、山東大學出版社1997年

中美兩城地區聯合考古隊「山東日照市兩城地區的考古調查」、『考古』1997年第4期

隋裕仁「黃河中下游龍山文化“城堡”初探」、『中原文物』1988年第4期

24) 宇野隆夫(王震中訳)「中國古代城市的方位概念—以商周時代為中心」、『考古與文物』2005年第1期

許宏『先秦城市考古學研究』、北京燕山出版社2000年

許宏「論夏商周三代城市之特質」、『三代文明研究(一):1998年河北邢台中國商周文明國際學術研討會論文集』、科學出版社1999年

秦建明「中國古代都城西北高台建築之謎」、『文博』1999年第1期

段鵬琦「洛陽古代都城城址遷移現象試析」、『考古與文物』1999年第4期

25) 楊純淵「考古學與歷史地理學之關係」、『山西省考古學會論文集』、山西人民出版社1994年

26) 王小盾・陶康華「中國史前文明研究的地理學方法」、『上海師範大學學報』1994年第3期

27) 王恩涌「文明起源的地理分析」、『北京大學學報』1995年第2期

人、土地との関係」<sup>28)</sup>、唐曉峰氏「初期中国の形成についての検討」<sup>29)</sup>などの研究がある。

ここで特筆したいのが黄盛璋氏の研究である。彼は地理学と考古学の関係について全面的な検討を行い、兼ねて非常に長いテーマの論文を発表してきた<sup>30)</sup>。しかし、彼の論文は、考古地理学に関する包括的な論議を含んでいるものの、考古地理学という概念を明確に意識した研究ではなかったと考えられる。

#### b. 先史時代の各地域経済発展の比較研究

これについては、「長江中・下流域における新石器時代の地域経済と集落の変遷」、「長江デルタと珠江デルタにおける新石器時代の経済形態の比較研究」、「集落配置から見た先史社会の交換形態の変化—西アジアの三事例を通して」などの研究論文を挙げることができ、研究の対象は西アジアにまで及んでいる<sup>31)</sup>。

#### c. 交通問題に関する研究

これについては、「トルファンにおける唐王朝の交通ルートに関する調査と研究」<sup>32)</sup>や、「黄河古棧道の諸問題について」<sup>33)</sup>、「最後のシルクロード—大海路の調査」<sup>34)</sup>などのような論文が挙げられ、考古学データにより内外交通問題についての研究がなされている。

#### d. 水利・河川に関する研究

これについては、「漢王朝成都水利の発展—考古発見の視点から」<sup>35)</sup>や「通濟堰石函—古代の立体排水工事」<sup>36)</sup>などの研究が挙げられる。

#### e. 環境地形変動研究

先史時代の集落（人間）と環境間との関係を調べる研究である。代表的な研究例は韓茂莉氏の「先史時代西遼河流域の集落と環境に関する研究」<sup>37)</sup>という論文である。作者は環境選択、標高、地形、時間や環境容量などの観点から、西遼河流域の先史時代集落の立地選定（標高400～600メートルの森林周辺）、規模、連続使用時間、移動の有無などを幅広く論じ、その結

28) 宋豫秦「考古學與人地關係研究」、『中原文物』2002年第6期

29) 唐曉峰「中國早期國家地域形成問題—讀書札記」、『九州』第2輯、商務印書館1999年

30) 黄盛璋「建立歷史地理考古學與其新理論、方法、道路研究、消除重大誤區、失誤、作為創建“東學新學”的新內容與成果標誌」、『亞洲文明』2008年第4集

31) 張馳「長江中下游新石器時代的區域經濟與聚落變遷」、『中國社會科學院古代文明研究中心通訊』2001年第12期

陳傑「長江三角洲與珠江三角洲新石器時代經濟形態比較研究」、『東南文化』1999年第1期

楊建華「從聚落佈局看史前社會交換方式的變化—來自西亞地區的三个實例」、『考古』1999年第5期

32) 巫新華『吐魯番唐代交通路線的考察與研究』、青島出版社1999年

33) 趙瑞民・張慶捷「關於黄河古棧道的若干問題」、『山西省考古學會論文集』山西古籍出版社2000年

34) 巫新華「最後の絲綢古道—大海道考察紀略」、『中國文物報』2000年2月29日

35) 王方「從考古發現看漢代成都水利的發展」、『四川文物』1999年第3期

36) 梁曉華「通濟堰石函—古代立體排水工程」、『中國文物報』1999年11月21日

37) 韓茂莉「史前時期西遼河流域聚落與環境研究」、『考古學報』2010年第1期

論は今後、この地域の先史集落研究の物差しとなる可能性を持つ。また他にも、「遺跡の分布から見た7000年～3000年前の山東半島北部地域の地形変化」<sup>38)</sup>や「江蘇省北部の海岸線変化に関する考古地理学研究」<sup>39)</sup>、「完新世海面変動による長江河口沿岸平野の新石器時代遺跡分布への影響」<sup>40)</sup>など、様々な角度から研究が行われている。

#### f. 環境理論と研究方法論

考古地理学にとって非常に重要な構成要素であり、多くの関連研究がある。代表例として、「環境考古学研究における地理学的調査の概要」<sup>41)</sup>、「生態環境から見た中国新石器時代の考古文化の分布」<sup>42)</sup>、「環境と中国先史文化の関係性における南北差異」<sup>43)</sup>、「完新世の環境変化と人・土地との関係について」<sup>44)</sup>、「新石器時代の湖畔住居と自然環境の管理—学際的環境研究法として」<sup>45)</sup>などが挙げられる。

その中には、「水東溝遺跡の堆積物—地形進化と古代人類の生活環境」<sup>46)</sup>などのように、より具体的でミクロ的な環境研究もある。

特に『環境考古学研究』は注目されるべき専門誌である。本雑誌は第四紀研究委員会の環境考古学専門委員会と北京大学環境科学研究センターが共同で編集しており、研究成果の発表に重要なプラットフォームを提供しているため、大いに価値がある。

#### g. 人文地理学と文化的要因の移転

論文「岳石文化期における海岱文化圏の人文地理学構成の進化分析」<sup>47)</sup>は、一定期間と一定地域における人文地理学パターンの変化を把握する試みである。また、「5000年前の文化遷移現象について」<sup>48)</sup>は、黄河流域全体を対象とし、主に文化的遺物の分布変化を軸に（例えば、山東省の遺物が陝西省に現れること）、独自の巨視的視点を持ってさまざまな考古文化（すなわち人口集落）の移動現象を調査し、環境的要因、文化的要因、社会的要因という観点からその変化と移転の原因を探った。この論文は研究視点と方法が斬新であり、注目に値すると指摘したい。

38) 徐其忠「従古文化遺址分佈看距今7000年-3000年間魯北地區地理地形的變遷」,『考古』1992年第11期

39) 劉志岩・孫林・高蒙河「蘇北海岸線變遷的考古地理研究」,『南方文物』2006年第4期

40) 王張華・陳傑「全新世海侵對長江口沿海平原新石器遺址分佈的影響」,『第四紀研究』2004年第5期

41) 李容全「環境考古研究中地學調查綱要」,『中國歷史博物館館刊』1995年第1期

42) 周俊玲「從生態環境看中國新石器時代文化分佈」,『華夏文化』1999年第3期

43) 曹兵武「略說環境與中國史前文化的南北差異」,『東南考古研究』第2輯,廈門大學出版社1999年

44) 武仙竹「全新世環境演變和人類關係機理研究—長江流域環境變化與人類活動的相互影響」,『東南文化』2000年第1期

45) 皮埃爾・白特・趙冰「新石器時代湖邊居地址和自然環境的管理—一種多學科交叉的環境研究方法」,『考古學研究』科學出版社2000年

46) 高星・袁寶印・裴樹文等「水洞溝遺址沉積—地貌演化與古人類生存環境」,『科學通報』2008年第10期

47) 高江濤・龐小霞「岳石文化時期海岱文化區人文地理格局演變探析」,『考古』2009年第11期

48) 許永傑「距今五千年前後文化遷徙現象初探」,『考古學報』2010年第2期



#### h. 文明の起源に関する議論

考古学データを使って文明の起源、特に中国文明の起源を論じる論文は数多く、ここで詳しく紹介する必要はないと思われるが、楊建華氏論文「黄河と両河流域の文明誕生」<sup>49)</sup>は、特に広い視野を持った文明起源の比較研究であり、特筆に値する。また張鎔生氏の「河洛地域—中国文明起源の中心と発祥の地」<sup>50)</sup>も、中国文明の起源問題について大変詳細に検討を加えた代表的な研究である。

#### i. 郷土史学、言語地理学

これについては、発掘された木簡・帛書を利用して郷土史学を研究する『長沙国研究』<sup>51)</sup>のような著書から、「中国南部の漢民族の起源問題：言語学から考古学へ」<sup>52)</sup>のような論文もあり、それぞれ独特な視点から研究がなされている。とりわけ、「言語学から考古学へ」は視点がユニークで興味深い。

### (3) 研究手法の充実

#### a. 新技術の応用

新技術の活用により新しい理論問題が生じる可能性があるため、GIS（地理情報システム）の利用について少し所感を述べたい。というのも、GISはもともと純粋な地理学の成果であるため、この手段を利用して「考古学的」問題を解明するとなると、研究の「特性」が変化する可能性があり、すなわち、果たして研究分野を「考古地理学」と呼ぶべきか、それとも「地理考古学」と呼ぶべきか、考える必要が出てくるためである。ここで自分の意見を展開することは控えるが、問題提起だけしておきたい。

GISを用いて考古学データを扱う研究は多く、関連の研究論文リストを作成すれば膨大な量になるが、「GISデータベースに基づく野外地層断面のデータマイニング—臨潼姜寨遺跡の事例研究」<sup>53)</sup>、「伊洛地域における裴李崗文化期から二里头文化期にかけての社会進化—地理情報システムに基づく人口と農業耕地についての分析」<sup>54)</sup>などは、その中で特に注目される研究例である。

#### b. 学際「浸潤」的研究

考古地理学自体は学際的であり、常にさまざまな分野が組み合わせられ、補完的な研究が行わ

49) 楊建華「試論文明在黄河與兩河流域的興起」,『華夏考古』1999年第4期

50) 張鎔生「河洛地區—中華文明起源的中心與發祥地」,『河南博物院落成暨河南省博物館建館70週年紀念論文集』,中州古籍出版社1998年

51) 羅慶庚『長沙國研究』,湖南人民出版社1998年

52) 鄧曉華「南中國漢人來源問題:從語言學到考古學」,『東南考古研究』第2輯,廈門大學出版社1999年

53) 楊林・閻國年・畢碩本等「基於GIS數據庫的田野考古地層剖面空間數據挖掘:以陝西臨潼姜寨遺址為例」,『地理與地理信息科學』2005年第2期

54) 喬玉「伊洛地區裴李崗至二里头文化時期複雜社會的演變—地理信息系統基礎上的人口和農業可耕地分析」,『考古學報』2010年第4期

れている。近年、異分野の新しい研究手法の導入や「浸潤」が見られるようになり、代表的な研究例は「安徽省淮北平原の先史遺跡に対する Thiessen 多角形法研究」<sup>55)</sup> という論文である。「Thiessen 多角形法」とは、もともと平均降雨量を算出する気象研究手法で、隣接するすべての気象観測所を三角形に連繋し、それから三角形各辺の垂直二等分線の交点を結び、多角形内唯一の気象観測所の降雨強度値を得、これにより多角形領域内の降雨強度を表すという方法である。作者は、この方法を淮北平原の先史集落研究に応用し、さまざまな考古文化の集落の集約状況、通信レベル、農業状況、生活環境、交流交通の特性を分析し、中心集落を有効に特定したのみならず、先史時代の農業、環境、交流などという人間と土地・環境の関係を合理的に推定した。更に、小多角形の分布方向性から、先史時代には北西－南東の古水系が淮北平野遺跡間の交通を制御していたという事実を突き止めた。

この他にも、王青氏の「河南省北西部竜山文化集落の制御ネットワークとパターン」<sup>56)</sup> は、「制御ネットワークとモード」のようなコンピューターサイエンス手法（用語、角度）を使って、集落の階層、資源配分バランスモード、つまり、集落間の相互依存（制御）度と分布パターンなど、竜山文化期の特定の地域における集落の「制御ネットワークとモード」を研究している。これもまた学際的相互影響・浸透を感じさせるものである。

このような新しい方法、新しい角度の応用は、考古地理学、考古学、歴史地理学などいずれの分野にとっても大きな進歩だと指摘したい。今後、更なる試みが増え続け、学術の繁栄・発展が促進されることを願いたい。

以上は、考古地理学が20世紀末、中国に導入されてから生じた影響及び新しい研究成果についての一般的な概説である。分類は必ずしも合理的ではなく、量も限られた一部だが、ここ数十年以来、特に21世紀以来における考古地理学の歩みがわずかながらもわかると言えよう。

## （二）研究体制の発展と変化

これについては、大学の教育制度、カリキュラム、研究機関の設置などの面から検討することができると考えられる。ここにも「意識的」と「客観的」の区別がある。

「意識的」な取り組みとしては、復旦大学文物博物館学部と復旦大学歴史地理研究所を例として挙げるができる。復旦大学文物博物館学部では、高蒙河研究チームがあり、考古地理学分野で修士と博士を輩出している。復旦大学歴史地理研究所も長い間、この分野で修士と博士を養成しており、考古地理学研究チームを充実させ続けている。

「客観的」な点においては、意識的な「考古地理学の研究及び学問分野構築の推進」は行われ

55) 吳立・李嬌陽・王心源「安徽淮北平原史前文化遺址 Thiessen 多邊形分析」、『地域研究與開發』第36巻5期、2017年

56) 王青「豫西北地區龍山文化聚落的控制網絡與模式」、『考古』2011年第1期

ていないが、大学における教育体制やカリキュラムの編成などはすべて考古地理学の発展に有利に働いているという状況である。言うまでもなく、学科の発展に伴い、考古地理学内部からも発展に対する構造的なモチベーションが高まっており、「客観的に」学科の発展・変化が加速する要因となっている。

考古学の継続的な発展につれて、地理学との関連はますます拡大しており、考古学の教育・研究における地理学関連内容の取り入れはもはや必至である。それと同時に、地理学、特に歴史地理学の教育・研究においても、考古学を知り、理解する必要性がますます高まっており、考古発掘で得られた地理情報をフルに活用し、それをもって自身及び関連分野の発展を促進していく必要が出てきている。

筆者は、考古学と地理学の相互補完および融合という観点から、さまざまな機会において、地理学部は考古学関連のコースを開設し、考古学部は地理学関連のコースを開設するなど、関連研究分野を有する大学がコース範囲を拡大する必要があると提案してきた<sup>57)</sup>。これは、学生の学問的視野を広げる上で、非常に前向きな意味を持つのみならず、異なるさまざまな学科の発展をも促進すると考える。筆者の提案や期待は、大学の教育或いは研究実践の中で次第に実現されており、大学における関連学部のコース内容も年々充実してきており、実に喜ばしいことだと感じている。

現代考古学と現代地理学は、ほぼ同時に中国に伝来し、常に密接な関係を保ってきており、それぞれの分野の専門家は、相互のコミュニケーションを保ちながら、相手の研究内容を尊重し評価してきた。特に、考古学科のある大学においては、常に地理学関連の科目が開講されており、中国で最初に出版された『考古学年鑑』(1984年)では、山東大学及び武漢大学の考古学専攻においてそれぞれ「山東の古代地理と文化」と「歴史地理学」と、地理学関連の科目が開講されていたことが記録されている。

それ以来、研究分野の発展及び学科間相互理解の深化に伴い、考古学専攻で地理学に関連する科目を開講する大学の数は年々増え続けた。『中国考古学年鑑 2007』によると、2005-06年では、考古学専攻のある8つの大学では以下の通り、計19の地理学関連科目が開講されていた：環境考古学(吉林大学、山東大学、南京大学、厦門大学、中山大学)、歴史地理学入門(四川大学)、環境変化(厦門大学)、人文地理学(吉林大学)、第四紀環境科学(吉林大学)、環境考古学方法論(吉林大学)、集落考古学研究(西北大学)、環境考古学研究(西北大学)、海外交通史跡(厦門大学)、都市考古学(北京大学)、地形学・第四紀地質学(吉林大学)、人類地理学(吉林大学)、第四紀環境科学(吉林大学)、地域先史考古学パターンと系譜(吉林大学)、蘇秉琦と区域系譜理論(吉林大学)、夏商周時期の青銅器文化(南京大学)、海外交通史跡と海洋考古学(厦門大学)、民族と地域文化(中山大学)、中外文化交流考古学(中山大学)。

57) 王妙發「理想的考古報告—不厭其詳的全信息報告」、『中國文物報』2001年9月7日

上記は、特定の2年間の調査であり、それほど精密な統計ではないが、一般的な傾向が見えると言えよう。それ以降更に、大学の考古学関連教育研究システムの変化が反映されたこともあり、地理学関連の科目はますます注目されている。その逆もまた同じく、歴史地理学を含む関連分野では考古学の発掘・研究成果は大いに注目され、積極的に利用されている。

上記の2年間のサンプル年に加えて、筆者は、最初の出版年である1984年から2014年版までの『中国考古学年鑑』に記載される大学の開講科目を集計した。2005-06年を除いた地理学関連の科目の名前は次のとおりである（但し省スペースのため、大学名を省略し、また「歴史地理学入門」に似た科目は一つにまとめ、別途に記さないことにする）。

GIS考古学・空間解析、中国海周辺海洋考古学、集落考古学、古代都市遺跡、海洋シルクロード考古学、地形・第四紀地質学、民族・地域文化、中外文化交流考古学、中国歴史地理学、第四紀人間環境学、第四紀地質学、完新世環境、地形・第四紀環境、歴史地理文献学、人間文化・自然環境学、動物生態学・地理学、中国歴史地理学特論、環境考古学特論、景観地形・環境学、人間文化・自然環境、海外交通史跡、環境考古学文献入門、環境考古学理論、環境考古学の最新発展、考古学調査とGIS、中国考古地理学研究、文化地理学、人文地理学、歴史地理学、歴史地理情報システム。

2015年以降の大学カリキュラムを集計することは今はまだ難しいが、中国の大学における考古地理学関連の教育は、概ね発展し続けていると言えよう。

#### 四、総括と展望

20世紀の終わりに考古地理学の専門概念が中国に導入されて、20年以上の歳月が経った。考古地理学は、中国でゼロからスタートし、歴史地理学の下位分野として成長を遂げ、優れた研究成果、及び豊富な研究人材の育成により、学科として徐々に確立された。しかし本学科は、成熟された学科と言うにはまだほど遠く、今後も長い道りを歩んでいく弛まぬ努力が必要とされる。

2022年7月2日、復旦大学で「考古地理学の理論と研究実践に関するシンポジウム」が開催された。これは中国で初めて開かれた考古地理学学会であり、時機を得たものであった。というのも、二十数年来、着実に考古地理学に関する理論建設が行われ、研究事例も多く蓄積されてきたため、理論的にも経験的にも学問を総括する必要が発生したからである。本シンポジウムでは、実際の研究事例の報告に加えて、中国考古地理学の研究現状の分析、分野導入以来の発展状況、現有の問題の指摘、及び発展の見通し、そして分野の理論的問題について議論がなされた。

その中でも特に見識の高い議論の例としては次のような指摘がある。「考古地理学はまだまだ発展の空間があり、『考古学化』の偏りを避け、『地理学化』を高め、地理学要素と構造の備っ

た比較的完全な研究システムを構築し、更なるフロンティアを開拓することが重要である」(高蒙河氏)。「考古地理学の学問的属性は地理学であり、地理学及び考古学のいずれの理論・方法も考古地理学の研究に適すると唱える上、考古地理学の研究形態や、如何にして古来の伝統文書や考古発掘データから地理情報を得て、実際のニーズに合わせて現実的な地理問題を解決するか考察すべきである」(馬保春氏)。「考古地理学は、考古学及び歴史地理学との間にある『可能性と境界』を再認識し、考古地理学者は、考古学データの史料としての特性をうまく利用すべきである。つまり、考古学データを利用して古文献の不足分を補い、複数古文献の相互検証を行うことができるので、考古学データから直接または間接的な地理情報を読み取るべきであるということである。更に、先史及び初期有史時代の集落調査における考古学データの重要性を指摘し、集落タイプについての研究は、形式上の分類に留まらず、如何にして、原始集落、中央集落、準都市集落、集落階層、都市などといった抽象概念を実存在の集落と結びつけるかが初期文明起源の探求上大きな意義を持つと指摘する」(毛曦氏)。

また、考古地理学は歴史地理学に分類されるもので、紛れもなく歴史地理学の不可欠な一部であるという学術的コンセンサスが形成されている一方、「しかしまだ、学科の本質的な内包が何かを正確に把握し、方向を定め、地道な探求を更に重ねる必要がある」、また「考古地理学の研究を推進し、その研究価値を重視することによって、より多くの考古学者が地理的要素に更に注意を払い、タイムリーに古い時代の地理情報を発見、記録、保存することで、更に多くの考古学者が考古地理学の研究に積極的に携わり、歴史地理学の研究内容が大幅に充実され、結果、繁栄と発展が期待される」<sup>58)</sup> といった論旨が挙げられよう。

以上のような論調の他に、本シンポジウムではまた、多くの研究事例が報告され、それらを通じて、中国の考古地理学分野の研究現状が窺われた。

学術研究においては、コンセンサスと意見の相違の双方が存在すべきであり、考古地理学の研究についても同じことが言える。今後考古地理学においては、コンセンサスを大事にしながら、異なる意見について論議を続けることによって更なる学問の促進を図っていくことが必要である。

今後とも、中国における考古地理学学科の継続的な発展及び研究の進境を期待してやまない。

---

58) 辛徳勇「考古地理學的意義與價值」,『澎湃新聞』2022年7月10日

## The Development of Archeological Geography in China

Miaofa WANG

### Abstract

Since the introduction of archaeological geography to China in the 90s, it has been accepted by Chinese academics and resulted in remarkable levels of achievement. This article summarizes the process of introduction, acceptance, absorption, and development of archaeological geography, analyzes research conducted prior to the its introduction, and discusses the usage of new technologies and future developments in this field of study.